特 260
236

合浦
生田敦盛
草子洗小町
六浦
松山鏡

外十

始

特260
236

342-623

合浦

作者不詳

曲柄　切能　五番目（略初能）
季節　不定
稽古順　五級
所　支那廣東省欽廉道廉州（合浦）

梗概

唐土合浦の浦に住む里人（ワキ）、一日浦に出でて、釣人の捕へたる魚を贖ひこれを海に放ちたり。その夜、里人の戸を叩きて一宿を求むるものあり。卽ち戸を開きて請じ入るれば、その樣化したる童子（前シテ）にして人間とは思はれず。怪しみてその名を問へば、われは鮫人（かうじん）といへる魚の精にて、命を助けられたる報謝の爲に來れるなり。わが泣く露の涙寶珠となるべければ、これを捧げん、合浦に入らせ給へといひて、渚の波に入るかと思へば、白魚となつて、そのまゝ消え失せぬ。（中入）

やがて、かのもの鮫人（後シテ）となつて現れ出で、龍女は如意の寶珠を釋尊に捧げて變成男子の果報を得たり、われも亦命の恩を報ぜざらんやといひて、寶珠を里人に捧げ、この珠を保たば、壽命長遠息災延命、當來二世の願をも成就すべしと告ぐ。かくて千秋萬歲の寶の珠は合浦の浦に納まりぬ。

謠ひ方

輕き曲なればさらりと淀みなく謠ふべし。

△**シテ**　童子なれば朗かにさらりと謠ひ出し、ワキとの掛合は朗かに、「今は何をか」と確かりと、「命をつがれ」より閑かに謠ふ。

△**後シテ**　剛壯に雄大に謠ひ出し、「これこそ眞如の」と閑めて謠ふ。

△**ワキ**　凡てさらりと謠ふ。

△**地**　初同はさらりと出で、「鮫人涙に」と閑かに、留をとくと閑め、中入後「奈落や」と乘つて大きく、以下運びを附け「現れたる」と大きく、「これこそ眞如の」とさらりと附け、「これまでなりや」より確かりと、以下祝言の心にてさらりと謠ふべし。

能の異式（小書）

一拍子の傳　―全體が重くなり、ワキへ寶珠を渡し、切を一拍子にて謠ひ出す。

語釋

わたづみの ― 海の事。

たゝく水鶏の ― 水鶏の鳴聲は戸を敲くやうに聞ゆれば、かくいふ。

埴生の小屋 ― 賤しき家をいふ。

我妹子が云々 ― 催馬樂に「妹が門や背なが門、行き過ぎかねてや我行かば、ひぢ笠の雨もや降らなんしでたをさ、雨やどり笠やどり、やどりてまからんしでたをさ」とあるを引用す。

此世ならぬ契りなり ― 現世ばかりの緣にはあらずとの意。

うろくづ ― 魚をいふ。然しこゝでは鮫人をさす。

などや命恩の ― 命を救はれし恩をば、鮫人とて忘れはせずとの意。人家に永く養はれしをいふ。

ひれふして ― 魚の鰭を伏することを、禮拜する意にかけていふなり。

龍女は云々 ― 法華經に、八歳の龍女、寶珠の釋尊に奉りて成佛せしことあるをいふ。

變成就 ― 女子は、五障とて男子に勝れて罪障多く、また三從とて、常に男子及びその他に屬して自在を得ず、この故に女子が佛と成らんには性を變じて男子とならざるべからず。大智度論に「女身作二轉輪聖王一無二是處一何以故、一切女人、皆屬二男子一不レ得二自在一故女人尚不レ得二轉輪聖王一何況作レ佛若女人得二解脫涅槃一亦因二男子一得、無レ有二自然得道一」と說き示したり。而し變成就の法とは、法華經提婆品に據りて、天臺宗は其宗義たる一心三觀の觀法を、變成男子の法といひ、淨土門は、阿彌陀佛の誓願に成れる他力念佛の法をいふ。卽ち大無量壽經四十八の誓願を說かれし中、第三十五に女人の成佛を誓はれしをいふ、其文は、「設我得レ佛十方無量不可思議諸佛世界、其有二女人一聞二我名字一歡喜信樂發二菩提心一厭二惡女身一壽終之後、復爲二女像一者、不レ取二正覺一」と示敎なしたり。こゝは寶珠を奉りし功德によりて、女子の身の男子に變成するといふ法華經の示敎をさす。

奈落 ― 地獄のこと。

眞如の玉の緒の ― 眞如の心の明らかなるを玉に譬へ、それを玉の緒につゞけたり。玉の緒は命のことをいふ。

當來 ― 未來の世をさす。

玉はふたゝび ― 彼の孟嘗の故事、「去珠後還」に寄せて、鮫人一度寶珠を與へて報恩し、無病延命の誓をなして復び寶珠と共に海中に沈みしことをいふ。

間狂言

前は漁師。中入後はうろくづの精。

是はこの浦に住居致す釣人で御座る。今日も濱へ出で釣を垂れうと存ずる。はあ。さても〳〵今日は一入海上も靜かに御座る程に。漁もござらうと存ずる。されば釣を垂れう。かゝればよいが。さればこそ引くは〳〵。おう引くは〳〵引くは。さあかゝつたは〳〵。したゝかな物ぢやは。是は何であらうぞ。やあら合點の行かぬ物ぢやが(ヲカシ)されば我等も當浦に年久しく住居致せども。かやうの魚は遂に見申したる事も御座なく候(ヲカシ)いや〳〵このやうな珍しい物は。まづ宿へ持つて參り人々に見せませう(ヲカシ)はあでござる。けにと仰せらるればさうで御座る。急いで放ちませう。しい〳〵しいしい。さても〳〵嬉しさうなは。潔(いさぎ)よい事かな。唯今の魚を放し申して候。鮫人魚な。(**中入後**)斯樣に候者は。合浦の海に年久しく住む鱗(うろくづ)の精にて候。我等のこれへ出づる事餘の儀にあらず。まづ此君賢王に在すにより。天も納受し地神も感をなし給ふ故。國土豊かに納まり雨露の惠みも一入にて。五穀成就仕り人民の樂しみ盡きせず。國々在々までも五常の道を專らに守り。殊に生けるを放ち給ふにより。我等如きの鱗までも。別してありがたう存ずる御代にて候。それにつき。こゝに喜慶と申す御方のおはすが。正直を第一として慈悲深く。別して親に孝ある事を。諸天も是をあはれみ給ひ富貴榮華に御座候。さて又今日浦遊びに出でられし處に。此海に住む鮫人と申す魚を漁師の釣揚け既にあやしめんと致すを。かの喜慶いろ〳〵申され助け給へば。鮫人は危き命を遁れ悅びをなし歸りて候。さあるによつて鮫人かの恩を報ぜん爲。龍宮海に隱れなき如意寶珠を。今宵喜慶に與へんとの御事なれば。この由喜慶に告げ知らせんと存じて罷り出た。まづあれへ參らう。誠に神あれば德ありと申すが。第一この浦はめでたい所にて。我等如きまでも寄り合ひ和合仕るによつて。合する浦と書いて合浦とは申す。しかしどこ許にぞ。さればこそ是におりやるよ。誠にその身直にして影かたまらずと云ふが。先は仁德氣高く富貴さうに見ゆるよ。急いで此事を告げ知らせ申さうする。いかに喜慶慥かに聞き給へ。此海に住む鮫人といふ魚。命助かり申す報恩の爲に。今宵如意寶珠を御身に與へんとの御事なれば。暫くこの所に御待ちあれ。其分心得候へ〳〵。

装束附（合浦）		
ワキ	里人	着附厚板　白大口　側次 繍紋腰帯　扇
前シテ	童子	面、慈童又ハ童子　黒頭 金緞鉢巻　襟浅黄　着附縫箔 水衣　縫腰帯　童扇
後シテ	鮫人	面、小飛出又ハ大飛出 白地金緞鉢巻　白頭　襟縁 着附厚板　半切　法被 繍紋腰帯　神扇
小道具		玉盆

合浦

素謡座席順　シテ　ワキ

ワキ男詞（サラリ）「これは唐土合浦の浦に住居する者にて候。今日は日もうらにて候程に。浦に出で釣するを眺めばやと存じ候（狂言シカゝ）

シテ童子上ヲ（サラリ）（拍子三合八大）「わたづみのそこともいさや白波の。龍の都を。出づるなり。（シキ一セイ）（ツヨク）（ヒラカヘ）詞（ヒラカヘ）いかにこの屋の内に主やまし〳〵ます。一夜の宿を。

か〜給へ。「ワキ日もはや暮れて戸ざしするに。宿とは誰にてまゝますぞ。シテ「カゝウテ確カリメ」よゝ誰なりともその情に。一村雨の雨宿り。一夜の宿を貸し給へ。ワキ「たゝく水鶏の外面に立つや久方の。埴生の小屋に小雨降る。シテ「床さえぬれば。ワキ「我妹子が。上歌同。ひぢ笠。

○小謡

の。雨は降り来ぬ雨宿り。雨は降り来ぬ雨宿りの。頼む木蔭かや。一樹の蔭の宿りもこの世ならぬ契りなり。一河の流れを汲みて知る。合浦の浦の江のほとりうろくづもなどや命恩のその情をば。知らざらんその情をばしらざらん。ワキ詞「何と見

中せども更に人間とは見え給
はずいと名を名乗りいへ　今は何
をかつむべきと。われは鮫人といへる
魚の精なり。命をつがれ参らせし。
報謝のために来りたり。わが泣く
涙の露の玉。絶えぬ寶となるべ
きなり

同中ケテスラリカヘテ
拍子合
鮫人涙に。玉をなして

命恩を。寶珠をなほも捧げて合浦
にも入らせ給へと。前なる。渚の彼の
上に。入るよと見えつるが。白魚とな
つてそのまゝ。ひれふして失せにけ
りあとひれふして失せにけり　中入
後シテ鮫人上リ
出端
又ハ早笛
拍子合ハズ
龍女は如意の寶珠を釋尊に捧げ。
變成就の法をなし　中入
同
確カリメニ
忍ニ元又
拍子合
奈落や

奈落の底の。白魚なれども。など
命恩を。報ぜざらんと。波立ちさわ
ぎ。汐うづまいて。うたかたの上にぞ
現れたる働

○仕舞

○「これこそ眞如の玉の
緒の　同　これこそ眞如の玉の緒の。
壽命長遠息災延命の寶の玉は。
當來までの。二世の願ひも。成就なる

べ。これまでなりや。徹りつる緒の。
浦は合浦。玉は二度。歸る波の。千秋
萬歳の寶の玉は。千秋萬歳の寶
の玉は。合浦の浦にぞとまりける。

生田敦盛

観世元安作

曲柄　二番目　修羅物
季節　七月
稽古順　五級
所　前、京都賀茂神社
　　後、摂津國神戸生田森

梗概

京都黒谷の法然上人、賀茂より下向の途次、さがり松の下にて二歳ばかりの捨兒を拾ひ歸りて養育せしほどに、はや十歳餘りになりぬ。一日上人說法の後、この事を物語りしに、聽衆の中より若き女性走り出で、それこそわが子よ、父は一の谷にて討たれ給ひし敦盛なりといふ。これを聞きて、敦盛の遺子（子方）父を慕ふこと限りなく、上人の從僧（ワキ）に伴はれて、賀茂の明神に一七日の參詣をなし、夢になりとも父に逢はせ給へと祈願を籠む。滿參の日靈夢あり、父に逢はんと思はゞ、攝津の國生田の森へ下れとの事に、悅びて直にかの地に到れば、草の庵にさも花やかなる若武者あり。われこそ汝が父敦盛（シテ）なれと名乘りて合戰の樣を語り、父子の對面を悅びて舞を舞ふ。折しも閻王の使來りて、敦盛はその苦患を受けしが、夜も明方になれば、修羅の敵は去り、敦盛も亦亡き跡の回向を乞ひて消え失す。

謠ひ方

修羅物の中にも公達物にて、此曲の特異なるは子方の有る事なり、現在物にならぬ樣に心掛け、輕き曲なれば重くなるを忌み、しつとりと謠ふべし。

△**シテ**　出は庵の內の獨言なれば調子を抑へて、老人にならぬ樣に運びを附け、「愚かの人の」と變へて閑かめに、「無慙やな」閑かにしめやかに、上端は朗かに、「嬉しやな」と氣を變へさらりと、「あれに見えたるは」と修羅となれば勢ひを込めて確かりと、「恥かしや子ながらも」と調子を內へ取りて謠ふ。

△**子方**　調子を高めさらりと、サシの謠ひ出しは殊勝に、「なう敦盛とは」とかゝつて謠ふ。

△**ワキ**　位を持たずさらりと、道行は朗かに謠ふ。

△**地**　初同はしつくりと出で、上歌はさらりと、「袂にすがり」と際さずにさらりと附け、「うき身に餘る」と閑め、「かくは思へど」と別に出で閑かに、「更け行く月の」と寬たりと　クセは閑かに、「名殘盡きせぬ」とさらりと受け、「いふかと見れば」

と手強く「月澄み渡りて」より朗かに、以下浮つきりと謠ふべし。

語　釋

黑谷 ― 京都市岡崎町にあり。紫雲山金戒光明寺、淨土宗鎭西派の本山。

法然上人 ― 名は源空、童名を勢至丸と號す。皇紀一千七百九十三年、崇德天皇長承二年四月七日を以て、美作國久米の南條、稻岡の莊に生る。父は久米押領使漆間時國、母は秦氏年甫めて九歲、その父故ありて人のために殺害せられしかば、其臨終の遺命に感じて出家す。十三歲比叡山に登り、源光に師事し、十五歲剃髮受戒し、大に天臺其他の敎義を研鑽す。十八歲黑谷に隱退し、慈眼房叡空の門下に入る。これより專ら經論の研究につとめ、五千卷の三藏を通讀すること五回、善導大師の註疏を反覆講讀すること八回の多きに及ぶ。或時は南都に歷遊して、法相、三論、眞言、華嚴の敎義を碩德に就きて攻究し、智慧第一の法然房と稱せらるゝに至れり。上人また、源信僧都の往生要集、善導大師の散善義を讀み、遂に念佛門の蘊義を達觀し、何れの時、如何なる機に於ても、易く安心立命し、大悟得證するは、唯この念佛の一途あるのみとの信念を起し、從來の諸行を放棄して念佛門に歸し、一日六萬遍の稱名念佛を修行するを、宗是とするの一宗を開立し給ふ。是れ實に皇紀一千八百三十五年、高倉天皇、安元元年にして、上人正に四十三歲の時なり。建曆二年正月八十歲にして洛東大谷の禪房に寂せらる。元祿十年勅して圓光大師の諡號を賜ふ。

賀茂 ― 山城國京都市にあり。

賀茂の明神 ― 賀茂別雷社（上社）賀茂御祖社（下社）をいふ。

滿參 ― 祈願の日數滿つる時をいふ。

糺の神 ― 賀茂御祖社をいふ。糺の森に鎭座すればなり。

生田の森 ― 神戸市三ノ宮以北の總稱、生田神社のある森なり。

山崎 ― 山城國乙訓郡にあり。

水無瀨川 ― 攝津國三島郡にあり。

秋は來にけり云々 ― 新古今集第四卷、秋歌上に載す、藤原家隆の歌、「百首歌よみけるうちに」と詞書して、「昨日だにとはむと思ひし津の國の生田の森に秋は來にけり」とあり、歌意は、昨日夏なりと思ひし頃でさへ訪はんとせし生田の森に、秋が來たゆゑいよ〳〵訪ふべしとの意。

生田の小野 ― 生田にあり。

五蘊もとよりこれ皆空 ― 五蘊とは色、受、想、行、識をいふ。蘊は、梵語塞建陀（スカンドハ）で蘊或は陰と譯す。蘊集の義で、同種類を蒐集し、分類するの謂なれば、是等は各人個體の屬性なりと知るべし。色は、吾人の肉體を指す、肉身卽ち物質は變壞し質碍あるものなるが故に色といふ。受、想、行、識は、心法卽ち精神上の分類なり。受は感覺に受け込む心にして、想は想像の心なり。前者を知覺とみれば、後者は音識の作用と見るべきか。これ等色受の二は共に、心所といへる心的作用を區別せるものゝ中に存せり。今特に、五蘊中に表出せる所以のものは、この二者は、吾人の煩惱を發生し、增上する主要なる心的作用なるによる。行とは、造作遷流の義、受想を除きて、自餘一切の心所と名づけらるゝ心的作用を指す。蓋しこれ等の心的作用は、造作し生滅するものなるを以てなり、識とは、前の心所に對して、心王と名づけらる六識、八識をさす。祖庭事苑に、「謂色、受、想、行、識、變礙曰レ色、領納曰レ受、取像曰レ想、造作曰レ行、了知曰レ識、亦名二五蘊一、蘊以二積聚一爲レ義、陰以言二其覆蔽一也」とあり。この五蘊より成れる體は待對的のものにして、風雨寒暑に變易し、苦樂得失に勞逸する生滅のものなるを以て、五蘊有待の身とも稱す。これ卽ち空なるを以てなり。古詩に曰く、「五蘊本來皆是空、因レ何平生愛二此身一、守レ軀幽魂飛二夜月一、失レ屍窮魄嚙二秋風一」とあり。以て知了すべし。作者未詳なり。

閻王 ― 閻魔王をいふ。地獄の主たり。

木曾のかけはし ― かけてといひかけ、更に木曾義仲に討たれたる意を含めたり。

花の都を立ち出で ― 壽永二年京都を出發せし事。

鄙の住居 ― 壽永二年、平家は安德天皇を奉じて、筑紫の太宰府に、讃岐國の屋島に行在所を移動したるをいふ。

又立ちかへる ― 壽永三年、京都近くに立ち歸りし事をいふ。

生田川の身を捨てし ― 大和物語に、「昔津の國に住む女ありけり。それをよばふ男、二人なんありける。一人は、その國に住む男、姓は荒原になんありける。今一人は和泉國の人になんありける。姓は血沼となんいひける。（中略）この川に浮きて侍る水鳥を射給へ。それを射あて給へらん人に奉らんといふ時に、いとよき事なりといひて射る程に、一人は頭の方を射つ、今一人は尾の方を射つ、當時いづれといふべくもあらぬに、女思ひわずらひて、「住みわびぬわが身なけてん津の國の生田の川は名のみなりけり」と詠みて、（中略）落ちいりぬ。（中略）男二人、やがて同じ所に落ちいりぬ」云々とあり。それを敦盛の討死せしに引用せり。

鸚鵡の袖ふれて ― 鸚鵡杯といふ盃の名にいひかく。袖にふれて酒宴を催すことなり。珍玩績考に、「贏之類多、爾雅云、贏小者蜾、郭云、蜾大者如レ斗、出二日南漲海中一可二以爲一酒杯一、按今所レ謂鸚鵡杯出二南海一」とあり。

修羅 ― 佛敎のいふ六道の一なり。

作物	シテ（平敦盛）	ワキ（黒谷ノ僧）	子方（敦盛ノ遺子）	装束附（生田敦盛）
藁屋	面、敦盛　黒垂　梨子打烏帽子 白鉢巻又ハ色鉢巻　襟赤浅黄 着附厚板唐織又ハ縫箔　白大口 又ハ紫大口　長絹又ハ單法被 繡紋腰帯　太刀　修羅扇	角帽子　着附無地熨斗目　水衣 腰帯　扇　數珠	角帽子　着附熨斗目　袴水衣 緞子腰帯　數珠	

素謡座席順　シテ　子方　ワキ

ワキ僧詞　裕タリ

「これは黒谷法然上人に仕へ申す者にてゐ。又これにわたりゐ人は。或時上人賀茂へ詣參詣御下向の時。さがり松の下に二歳ばかりなる男子のうつくしきを。手箱の蓋に入れ尋常に拵へ捨て置きてゐを。

上人不便に思し召され抱かせ御
帰りれひて。色々そだて給ひれ
程に。はや十歳に御餘りれ。父母の
なき事を歎き給ひれ程に。説法
の後この事を御物語りれへば。聽
衆の中より若き女性の老り
出で。わがゐにてれ由仰せれをひそ

かに御尋ねれへば。一年一の谷にて
討たれ給ひ。敦盛の御子にて
おはましれ。この事を聞き給ひ
て。夢になりとも父の姿を見せて
給はりれへと。賀茂の明神へ祈誓
あるべき由仰せられひて。一七日
詣で給ひ。今日はは満参にてれ

程に。同道申し賀茂の明神へ参詣
申しに。これはは（元ヲカヘシ雅カリメ）や賀茂の明神にて
ぼ座に。よくよくぼ祈誓（チカヒ）へ（千方僧サン上）ありがた
や所からなる市社の。朱の玉垣神
さびて。心も澄める手洗の。深
き恵みを頼むなり（拍子合カヘテ）夢になりと
もたらちねのその面影を見せ給へ（寛タリ）

○小謡

上歌（サラリメ）

○かくばかり（ル）。祈る心の末遂げば。祈る
心の末遂げば。恵みになどか漏る
べきと。誓ひ（元ヘ戻シ）乞（ヒ）の神とともに願ひを
叶へおはしまませ願ひを叶へおはし
ませ。（子方詞）「あら不思議や。少し睡眠の
内にあらたに霊夢を蒙りてい
（ワキ）「あらめでたやなぼ霊夢のやうを

御物語りに（子方サフリ）「あの御寶殿の内
よりも。あらたなる御聲にて。
汝夢になりとも父を見んと思
はゞ。これより津の國生田の森へ
下れと。あらたに靈夢を蒙りて
（ワキウケテステリ）「これは不思議なる事にてゐもの
かな。黒谷（クロダニ）へ御（ン）帰りあるまでもなくゐ。

これより生田の森へ御供申しゐべ〜。
やがて思ひ召し立ちゐへ（道行上来リ）「山陰（ヤマカゲ）（元ヘ戻シ）
の賀茂の宮居を立ち出で〜。賀（ヤ切）
茂の宮居を立ち出で。急ぐ行く
へは山崎や。霧（エ切）立ち渡る水無瀬川（ツ切）。
風も身にしむ旅衣。秋は来にけり
昨日だに。訪はんと思ひし津の國の。

生田の森に着きにけり

元ヲカヘ

生田の森に着きにけり生田の森に着きにけり

ロキ詞元ヲカヘサラリ「御」急ぎは程に。

これはは津の國生田の森にて。

森の氣色川の流れ。都にて承り及びたるにもいやまさりて面白き名所にて。元ヲカヘあれに見えたる野邊は生田のゝ野にてもやらん。立ち寄り

シテ

なゞめばやと思ひ。元ヲカヘかゝることを眺めん程に。はや日の暮れてはいかに。あれに燈火の影の見えては人家にてありげにや。立ち寄り宿を借らばやと思ひ。元ヲカヘ確カリメシテ敷盛サシエニシヨクサラリ「五蘊もとより拍子合ハズツヨク」これ皆空。何によつて平生この身を愛せん。軀を守る幽魂は夜月

に飛び。尻を失ひ、ぐはくは秋風に嘯く。あら心すごの折柄やな　「不思議やなこれなる草の庵の内にも華やかなる若武者の。甲冑を帯し見え給ふぞや。これはいかなる事やらん　「おろかの人の心やな。面々これまで来り給ふも。われに對面のため

同上

ならずやはづかしながら古の。敦盛が幽霊来りたり　「なう敦盛とはわが父かと。身にも覺えず走りより袂にすがり絶えこがれ。泣く音に立つる鶯の。逢ふ事のうれしさも。うき身にあまるばかりなり。かくは思へど頼まれぬ

中　夢の契りを現に返すよしもがな

シテ上　拍子合ハス　無慙やな忘れがたみの撫子の華や

かなるべき身なれども。衰へはつる墨

染の袂を見るこそあはれなれ。さて

も御身孝行の心深き故。賀茂の

明神に歩みを運び。夢になりと

もわが父の姿を見せてたび給へ

と祈誓申す。明神あはれみおはし

まし。閻王に仰せつかはさる。閻王仰

せを承り。暫しの暇を賜はるなり。

中ノ持シ　親子の契りも今を限りなるべし

同　中ノ掛カリ　カヘテ　拍子ニ合　更け行く月の夜もすがら昔を

いざや語らん。切　然るに平家の栄華

を極めしその始め。花鳥風月の

○切迄囃子

○仕舞

たはむれ詩歌管絃の、様ざに春
秋を送り迎へしにいかなるをりか
来りけん。木曾の桟道かけてだに。
恩はぬ敵におとされて。主上を始め
奉り一門の人も悉く。花の都を立ち
出で西海の空に赴きぬ。習はぬ
旅の道すがら。山を越え海を渡り。

暫しは天ざかる。鄙の住居の身な
りしに。立ち帰る浦波の。須磨
の山路や一の谷。生田の森に着きしか
ばそは都も程近しと。一門の人ぞ
も喜びをなし折節に範頼義
経のその勢同雲や霞の如くにて。
暫く戦ふといへども平家は運も

槻弓の。やたけ心もよわよわと。皆散り散りになりはて。あはれも深き生田川の。身を捨てし物語。かたるぞよなかりける。○ツヨク「嬉しやな。夢の契りの假初ながら。親子鸚鵡の袖ふれて　名残つきせぬ。心かな　中之舞

○仕舞

シテ詞　カシテ確カリ

○「あれに見えたるは如何なる者ぞ。なに

閻王よりの御使とや。片時の暇も。ありつるに。今までの遅参心得ず。と。閻王怒らせ給ふぞと　同上　いかと見れば不思議やな。いかと見れば不思議やな。黒雲俄かに立ち来り。猛火を放ち。剱を降らして。その數知らざる修羅の敵。天地を

響かゝ立ち滿ちたり（シテ中）「ものもし
明暮に（同元戻シ）馴れつる修羅の敵ぞかし
と。太刀眞向に。さゝかざゝ。こてやか
しこに走り廻り。火花を散らして
戰ひゝが。暫くありて黑雲も。次
第に立ち去り修羅の敵も忽ちに
消え失せて。月澄み渡りて明々

たる暁の空とぞなりたりける（同受ケテスラリ尺ウ元）
シテ中「孤かゝや子ながらも（同元）かく苦みを
見る事よ。急ぎ帰りて亡き跡を
上（元）懇に弔ひてたび給へと。泣く泣く
袂を引き別れ。立ち去る姿は晴嶺
のゝ野の淺茅の露霜と形は消
えて。失せにけり形は消えて失せ

てけり。

草子洗小町

觀阿彌清次作

曲柄　三番目
季節　四月
稽古順　三級
所　前、京都小野小町邸
　　後、同内裏

梗概

内裏に御歌合あり、大伴の黒主（ワキ）が相手には小町（前シテ）と定められしが、黒主は小町に敵し難きを知り、その前日、小町の私宅に忍び入り、小町の詠歌を聞きて萬葉集に加筆し、古歌なりと詐ひて奇勝を取らんと企つ。（中入）時は四月半ば、清涼殿の御會に、貫之（ツレ）以下歌人の面々、天子（子方）の御前に侍し、既にして御歌合は始められたり。即ち貫之小町の歌を讀み上ぐれば、黒主これは古歌なりと奏す。小町（後シテ）驚きて、その證據を求むれば、黒主やをら懐より萬葉の草子を出して證歌を示す。小町更に草子を洗ひて眞僞を明らかにせんことを望み、勅許を得てこれを洗へば、素より入筆なれば、文字は一字も殘らず消え失せたり。黒主終に面目を失して自害せんとすれば、小町恨みを忘れてこれを留め、道を嗜む志誰もかうこそあるべけれと慰む。乃ち小町勅諚によりて舞を舞ひ、御代の長久を祝ひ、和歌の德を稱す。

謡ひ方

重き曲には非れども、清涼殿の御歌合せと云ふ上品なるものなれば、全曲を通じて嚴肅の中に花やかなる氣分を存し、歌を爭ふ一段の如きは、下品なる語調又は氣合の掛り過ぐるを忌む、總じて優美に卑しからぬ樣に謡ふべし。

△**シテ**　歌を案ずる體なれば極閑かに、落着いて品よく謡ひ出し、「面白や水邊草」と氣を替へ晴れやかに「蒔かなくに」と歌を詠むなれば、調子を内へ取り浮かぬ樣に謡ふ。

△**後シテ**　次第は謡はず、「恥かしの」と閑かにだれぬ樣に、「和歌の浦わに」よりクドキの心にて、「委しく仰せ候へ」と調子を内へ取り、以下ワキとの掛合は品位を保ち、優美に賤しくならぬ樣に、「恨めしやこの道の」と調子内へ取りて抑へめに「恨めしやな」と閑め、「この歌古歌なりとて」よりクドキなれば、調子浮かず粘らぬ樣に運び「いか樣小町が」とはつきりと「とにかくに思ひまはせども」としつとりと閑かに、「綸言なれば」と引立てゝ晴れやかに、「天の川瀬に」以下朗かにたつ

ぶりと、「濁れる世を」以下、地との掛合は閑かにうつきりと「なうなう暫く」ワキの詞に掛け、調子高く「この身皆以て」と氣の拔けぬやうに伸んびりと續け、「春來つては」以下朗かに伸んびりと「霞立つ」と閑かに、ワカは朗かに優美に謠ふ。

△**ツレ貫之**　次第はワキと共に謠ふ、常のツレより位を取り確かりと謠ふ、「ほの〳〵と」より大きくたつぷりと、王との掛合は叮嚀に、「水邊の草」と一寸間を置き「時かなくに」と朗かにはつきりと謠ふ。

△**子方王**　品よくさらりと謠ふ。

△**ワキ**　品よく位を保ち、名乘は確かりと、次第は貫之立衆と一所に謠ひ、シテとの掛合は確かりと雖も、荒く賤しくならぬ樣に、「よく〳〵物を案ずるに」と閑かに謠ふべし。

△**地**　初同は長閑かにはんなりと、「道となれ」と閑め、「その歌人の」と强吟になると位もさらりとなり、「不思議や上古も」とさらりと出で「と思ふべし」と閑め、「さらば證歌を」と强吟にて氣を變へさらりと謠ひ行き、「歌人さへ」と閑め、「胸に苦しき」より柔吟にて閑め「ましてや」ととくと閑め、「泣く〳〵立ちて」としつとりと、「和歌の浦わの」と寛たりと出で「秋の七日の」以下晴れやかに大きく、ロンギは調子を變へ朗かにさらりと謠ふ。此ロンギ調子が一句一句高まり易く、不用意に謠へば止まる處を知らざるなれば、シテの調子を受くる毎に出の假名に注意し、すくひ抑へに心を用ひて謠ふべし、「けに有難きみぎんかな」と晴れやかにさらりと「座敷を靜め」と閑め、「石に障りて」と受けて大きく「日影に見ゆる」と浮きやかに派手に謠ふ、この切も調子が高くなりたがるものなり、注意を要す。

語　釋

小野小町　―　小野良實の女、容姿艶麗當代に冠たり。又和歌に長ず、古今集に收錄せるもの數しとせず。其他の傳記に至りては詳かになし難し。世に玉造小町壯衰書といふものあり。空海の著ともいふ。或は三善清行の著なりとも稱すれども明かならず。書中、小町老年に及び道路に乞食することをいへり。後人多くこれを以て小野小町となす。十訓抄、古今著聞集の如き皆この事を載せ、無名抄又在原業平の體骸歌を引用して、兩小町の兩人なるをいへるも蓋し信ずるに足らず。本曲の小町は、內裏の御歌合に差し出すべき歌を吟じ居たり。小町の對手は大伴黑主と定めありしかば、黑主これを立聞して萬葉集に加筆し、當日小町の歌を古歌なりと難じたるが、あらはれて自害せんとす。帝王これをとゞめ、小町に舞を舞はせ、奏樂せしむることを作れるなり。

大伴黑主　―　六歌仙の一人。近江の人、滋賀大友鄕に住居せしを以て滋賀黑主ともいふ。郡領となりて從八位上に叙せらる。**貞觀中園城寺を以て延曆寺の別院となすに當り、黑主を以て神社別當となす。**延喜中宇多法皇の打出濱行幸に侍し歌を詠じて奉る。法皇大に悅び物を賜へり。蓋し黑主は歌に巧みにして其風逸興あり。然れども體鄙しきを以て、田夫の花前に憩ふが如しと評せらる。其歌古今、後選、拾遺集に出づ。

御歌合　―　歌人を左右に分ち、歌を左右々々と一番づゝ組み合せて、勝負を競爭する遊びをいふ。

救世の提闡（だいせん）　―　闡提といふべきを轉倒せるなり。大惡不信の徒を指す。この闡堤の徒まで救ひたまふ大慈悲者といふ意を示して、救世の闡提といふなり。また一說に闡提に二種あり。一は極惡不信の徒を指す、こは語の當義なり。二は大悲闡提とて、地藏菩薩の如く、衆生濟度の慈心深くして、永久成佛せざるものを稱す、こは極惡の徒の、永く成佛の期なき義邊を應用したるものなれば、轉義といふべし。

片岡山の製を云々　―　大和の片岡山を過ぎ給ひし時、餓死せる人を見給ひて、「しなてるや片岡山に飯に餓て臥せる旅人あはれ親なし」とよみ給ひしをいふ。

道の道たるは常の道にはあらず　―　老子、上編、首章に、「道可レ道非二常道一、名可レ名非二常名一」とあり。

人丸　―　六歌仙の一人、持統、文武の二朝に仕ふ。其先は天足彥國押人命より出づ。新田部皇子、高市皇子等と遊び駕に陪して紀伊伊勢雷岳吉野等に行く。其詠歌萬葉集を始めとして、諸集にあるもの一として千古の名吟ならざるなし。時人目して歌聖となす。晩年石見にて終りぬ。

赤人　―　姓山部、神龜天平の間常に聖武帝の駕に陪して出遊す。和歌に巧みにして、當時柿本人麿と共名を齊ふせり。不盡山を望んでよめる歌尤も世にあらはる。

河內の躬恒　―　凡河內の略稱、六歌仙の一人。寬平年中甲斐權少目となり、後、醍醐帝に召されて御書所に候す。延喜中御厨子所にうつり和泉大椽となる。紀貫之等と共に古今和歌集を選し、歌聖を以て目せらる。其家に一櫻樹あり、花の盛時に人多く來る。躬恒人心の轉變を慨しての詠に、「わがやどの花見がてらに來る人は散りなむ後ぞ戀しかるべき」といへり。

紀の貫之　―　望行の子。延喜中御書所預となり、越前權少椽、內膳典膳、少內記を歷て大內記に轉じ、從五位下に叙す。尋いで加賀美濃等の介となり、延長中大監物右京亮に拜し、また土佐守に任じて下國し、承平中任滿ちて京に歸る。天慶中玄蕃頭となり、木工權頭に遷り、從四位に陞る。九年卒す。貫之書を能くし、また和歌に長じ妙神に入る。曾て勅を奉じて、紀友則、凡河內躬恒、壬生忠岑等と共に古今和歌集を撰し、これが序を作る。而して貫之の詠にして集中に入るもの一百首、蓋し特旨により此榮に與れるなり。後また萬葉集鈔、

新撰和歌集等を撰す。後人歌仙を撰するもの、皆貫之を推して第一とす。明治三十七年四月十八日特旨を以て從二位を贈らる。

壬生の忠岑 ― 從五位下安綱の子、初め藤原定國の隨身たり、後左近衛番長右衛門府生御厨子所預攝津大目に累進して六位に叙せらる。紀貫之等と共に勅を奉じて、古今和歌集を撰ぶ。

ほの〳〵と云々 ― 古今集第九卷、羈旅歌に載す、「この歌は或る人のいはく柿の本人丸の歌なり」と註してあれど詳かならず、古來强いて人丸の歌となしたり。「ほの〳〵とあかしの浦のあさ霧に島隱れゆく舟をしぞおもふ」とあり。歌意は、ほんのりと明けて來る明石の浦の朝霧に漕ぎ出して、向ふの島に隱れて見えずなりゆく舟を哀れと思ふとの意。

既に衣通姫 ― 允恭天皇の妃にて和歌の名人なり。神と現れて、歌道を守り給ふ事を跡を垂るゝといふ。玉津島明神は、紀伊國和歌の浦にありて、衣通姫を祭る。

奈良の天子の御宇 ― 奈良に都し給ひし元明、元正、聖武、孝謙、淳仁、稱德、光仁の御七代をいふ。

橘の諸兄 ― 治部卿美努王の子、初名葛城諸王の列たり。和銅中從五位下に叙し、天平初年正四位下左大辨となり、三年參議に任ぜらる。八年矛佑爲王と共に上表して、橘宿禰姓を請ふて許さる。九年大納言となり、十年正三位に叙せらる。尋いで右大臣從二位に進み、十五年五月從一位に叙せられ、左大臣兼太宰帥に轉ず。改めて姓朝臣を賜はり、天平勝寶年中正一位に進み、天平寶字元年薨ず、年七十四。諸兄井手里に居る、依て井手左大臣又は西院大臣と稱せらる。

衣通姫の流なれば云々 ― 古今集の假名序に、「小野の小町は古への衣通姫の流れなり。あはれなるやうにて强からず」とあるを引く。

猿丸太夫の流れ云々 ― 古今集漢文序に、「大伴黑主之歌、古猿丸太夫之姿也」とあるを引く。猿丸太夫は歌人にて攝津國の人、近江國曾東山中に隱棲して終る。一說に、山背大兄王の第三子弓削王の別名なりと傳へらる。

花の蔭ゆく云々 ― 古今集の序に、「大伴の黑主は其さま賤し、いはゞ薪負へる山人の花の蔭に休めるが如し」とあるを引く。

富士のなるさの大將や云々 ― 鴨長明の無名抄に、「五條の三位入道（俊成のこと）は、此道の長者にていますが、されど富士の鳴澤を富士のなるさとよみて、なるさの入道、名なしの大將とつがひて、人に笑はれ給ひしかば、いみじき此道の遺恨にて侍りし、おの〳〵是ほどの事知り給はぬにはあらじ、思ひわたり給へりけるにこそ」とあるをいふ。

四病 ― 喜撰式に、「一に岸樹病、二に風燭病、三に浪船病、四に落花病」と見ゆ、これなり。

八病 ― 喜撰式に、「一に同心病、二に亂思、三に爛蝶、四に緒鴻、五に花橘病、六に老楓病、七に中絶病、八に後悔病」とあり。これをいふ。

三代 ― 古今集、後撰集、拾遺集の三集を指す。

八部 ― 三代集に後拾遺集、新古今集、金葉集、詞花集、千載集の五集を合せて八代集といふ。

青丹衣 ― 濃青に黃をさしたる衣、恥の上に恥を上ぬりする意。

纐川に云々 ― 高士傳に、堯の時に許由といひし人、濁れたる事を聞きたりとて、耳を潁水といふ川にて洗ひ清めし古事見えたり。

舊苔の云々 ― 朗詠集、早春に載す、春暖、都良香の詩句、「氣霽風梳三新柳髮一、氷消浪洗三舊苔鬚一」とあり。詩意は、天氣晴朗の日、風の柳を吹き靡かしたるは髮をくしけづるに似て、苔生ひたる岩に浪のかゝるは、鬚を洗ふに似てをるといふ意。或說に、「良香上句を作つて下句を作り煩ふて、これを案じつつ羅城門の前を過ぎけるに、羅城門の鬼、樓上にて恐ろしけなる聲して下句を云ひけり。良香恐れながら菅丞相に逢ひ奉りて、斯る詩を作つて候ふと申しければ、僻事なり、下句は羅城門の鬼のつけたるとこそ云ひしかと仰せられしかば、良香涙を流して三たび拜し奉つて實にしか侍りし事也と申しける」とあり。都良香は主計頭貞繼の男、文章博士たり。醍醐天皇の御宇の人なり。

庭火 ― 庭火は、神樂の時、神前にて焚火をするをいふ。

住吉の云々 ― 後拾遺集第四卷、雜歌四に載す、源經信の歌「沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白波」とあり。

出雲 ― 素盞嗚尊を指す。「八雲たつ」の神詠に依りて歌道の祖とす。

花の打衣 ― 花の模樣ある打衣の意。

風折烏帽子 ― 立烏帽子の頂を横に折りたるものをいふ。

笏拍子 ― 笏を二つ打合せて音を出すことをいふ。

春來つては云々 ― 朗詠集、三月三日に載す、桃源行、王維の詩句、「漁舟逐レ水愛レ山春、兩岸桃花夾三去津一、坐看三紅樹一不レ知レ遠、行三盡青溪一不レ見レ人、山口潛行始隈隩、山開曠望旋平陸、遙看一處攢三雲樹一、近入千家散三花竹一、樵客初傳漢姓名、居人未レ改秦衣服、居人共住武陵源、還從三物外一起三田園一、月明松下房櫳靜、日出雲中鷄犬喧、驚聞三俗客一爭來集、競引還レ家問三都邑一、平明閭巷掃レ花開、薄暮漁樵乘レ水入、初因レ避レ地去三人間一、及レ至レ成レ仙遂不レ還、峽裏誰知有三人事一、世中遙望空三雲山一、不レ疑靈境難三聞見一、塵心未盡思三鄉縣一、出レ洞無レ論隔三山水一、辭レ家終擬長遊行、自謂經レ過舊不レ迷、安知

峯槩今來變、當時只記入レ山深、青溪幾曲到ニ雲林一、春來遍是桃花水、不レ辨ニ仙源一何處尋」とあり。桃源行とは、桃花源とて仙境をいふ。三月三日には、何れの處にも花の水あり。何をしるしとしてか仙源を尋ねんとの意なり。桃花の水について仙宮に至る本文あれば、かくいふなり。桃源記に、「昔、漢の世に武陵といふ處の人、漁りすとて舟に乗りて江を上り行くに、江の水上に桃の木多く生ひ連りて花盛んに咲けり。(中略)行けば、男女二人居たり。漁りの男問うて君等何人なれば、斯く居給へるといへば、答へていふ。我は秦の時に難を去つて夫婦共に此山に隱れたり。今は八十餘年になりぬ。物食はずして十三年になりたりと、漁夫怪しみ憐れみて食物を與へければ、言ふ事世の常人の如し。彼を桃源の隱士と名づくといへり。」とあり。王維、字は摩詰、太原の人なり。開元の始進士となり、三たび倘書となる。

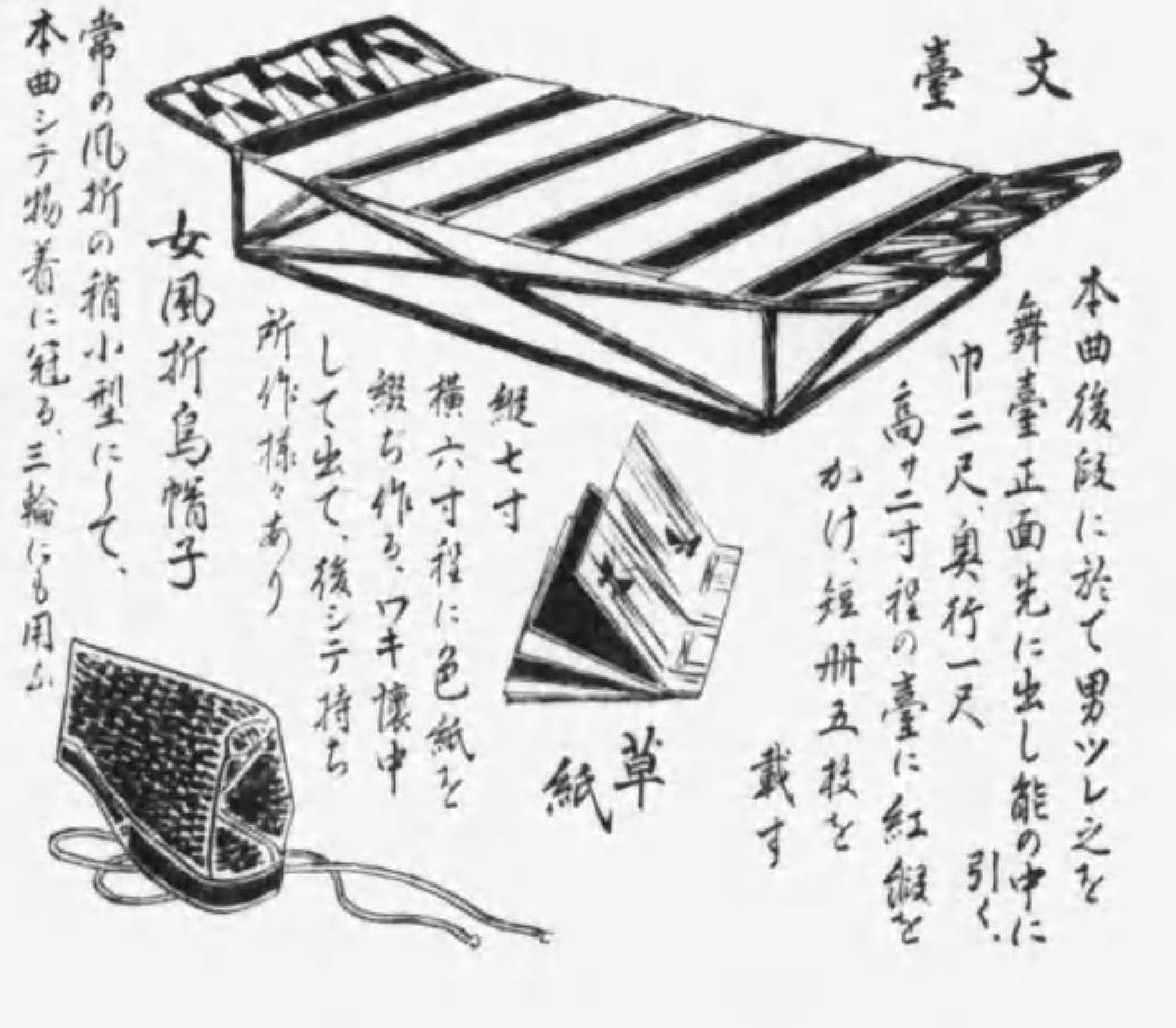
石に障りて ― 朗詠集、三月三日に載す、「遶レ流送ニ羽觴一、菅雅規の詩句、「礙レ石遲來心竊待、牽レ流遥過手先遮」とあり。詩意は、曲水の宴のありさまをいふ。

間狂言

ワキの從者。

（ワキしかぐ）御前に候（ワキしかぐ）なかく承つて御座る（ワキしかぐ）先我等の覺えたる通りを申し上げうずる。蒔かなくに何を種とて

瓜蔓（うりづる）の。畠のうねをまろび轉びあるくらんと聞いて御座る。（ワキしかぐ）さても今度禁中に於て。御歌合の御座候それにつき。小野の小町の相手には。某の賴み申す大伴の黒主を御定めなさるゝ。さる程に黒主心に思し召す樣。小野は世上に名高き歌の上手なれば。一定（ぢやう）詠み劣らん事を無念に存ぜられ。忍びて小野の館へ御出であり。歌の下讀みを竊かに立ち聞き致されけるを。小町はそれを夢にも御存じなく。蒔かなくに何を種とて浮草の。波のうねく生ひ茂るらんと。高らかに吟じられたるを。黒主はとくと聞き請け給ひ。宿へ御歸りあり。萬葉集に書き載せ。古歌なりと難ぜられんとの御たくみにて候。されば是につき。世間には聞かれて悔ふ事と又聞かれぬを悔ふ事と。同じ悔ひやうにて心の變りたる事が御座る。その故は。唐土に子期伯牙とて兩人琴の上手のありしが。互に秘曲を彈き聞いつ聞かれつ樂まれけるに。或時子期空しくなられけん以後。伯牙琴を止められたると申す。是は琴を聞き知る者のなき悔。今の小町は詠吟聞かれて悔ひ思さんと存ずる事ぢや。いや由なき獨り言に時刻の移りたれば。やうく黒主參內なされうずる間。某も御供仕らう。しからば傍輩衆を賴み申すぞ。唯今にても黒主の御出とあらば。此方へ御知らせあつて給はれ。構て其分心得候へく。



装束附（草子洗小町）

役	人物	装束
前ワキ	大伴黒主	風折烏帽子　着附厚板　白大口　長絹　繍紋腰帯　神扇
前シテ	小野小町	面、深井又ハ若女　鬘　鬘帯　襟白二　着附摺箔　唐織着流
子方	王	初冠　襟赤　着附赤地縫箔　緋精好指貫又ハ紫指貫　單狩衣　繍紋腰帯　黒骨爪紅扇
後シテ	小野小町	面、深井又ハ若女　鬘　鬘帯　襟白二　着附摺箔　緋大口　唐織坪折　胴箔腰帯　鬘扇
女ツレ	官女二人	面、連面　鬘　鬘帯　襟赤　着附摺箔　緋大口　唐織坪折　黒骨扇
男ツレ	壬生忠岑　河内躬恒	直面　風折烏帽子　着附厚板　白大口　男長絹　繍紋腰帯　神扇
ツレ	紀貫之	直面　翁烏帽子　着附厚板　白大口　單狩衣　繍紋腰帯　神扇
後ワキ	大伴黒主	風折烏帽子　着附厚板　白大口　單狩衣　繍紋腰帯　神扇
作物		文臺　短冊　草子

草子洗小町

素謡座席順

ワキ　子方
シテ　立衆方
ツレ　貫之

ワキ　名乗

「これは大伴の黒主にてゝ候。さても明日内裏にて御歌合あるべしとて。黒主が相手には小野の小町を御定めゝ候と申すは歌の上手にて。更に相手には叶ひがたくゝ程に。明日の歌を定めて吟ぜぬ

事はいまゞかの私宅へ忍び入り。

歌を聞かばやと存じ

シテ小町サシ上ヒ　曾釋　拍子ニ合ハス

それ歌の源を尋ぬるに。聖徳太子

は救世の提闡。片岡山の製を路世

に弘め給ふ。さても明日内裏にて

御歌合あるべきとて。小町が相手

には黒主を御定あいひて。水邊

の草といふ題を賜はりたり。面白や

水邊の草といふ題に浮かみてい

はいかに。蒔かなくに何を種として浮

草の波のうねうねと生ひ茂るらん。この歌

をやがて短冊にうつしさむらはん　中入

ワキ　いかに唯今の歌を聞いてあるか

狂言　さんぬ承りてゝ　ワキ　何と聞いてあるぞ

狂言

「時かなくに何を種として瓜蔓の畠のうねをまろびころびあるくらん。

ワキ 確カリサラリ

「いやさやうにてはなきぞ。道の道たるは常の道にはあらず。知れるを以て道とす。不得心なる事にてはへども。唯今の歌を萬葉の章子にうつし。帝へ古歌と訴へ申し。

明日の御歌合に勝たばやと存じれ ワキ中入

ツレ貫之 ツレ立衆上 サラリ 次オ ツヨク 拍子ニ合

「めでたき帝代の歌合。めでたき帝代の歌合。詠じて君を仰がん

サシ上 サラリ

「時しも頃は卯月半ば。清涼殿の

拍子ニ合ス

成會なれば。華やかにこそ見え

たりけれ

貫之 ユツタリ

「かくて人丸赤人の帝影

貫之立衆 サラリ オ

「各々詠みたる短冊をわれ

を掛け

もわれもとそ取り出だし。御影の前に
にぞ置きたりける。「さて御前の
人々には」「小町を始め河内の躬
恒紀の貫之」「右衛門の府生壬生
の忠岑」「ひだりみぎりに着座して
既に詠をぞ始めける。ほのぼのと。
明石の浦の。朝霧に。島隠れ行く。

舟をこそ思へ。げに島隠れ入る
月の。げに島隠れ入る月の。淡路の
繪島國なれや。始めて歌の遊びこそ
心和らぐ道となれ。その歌人の名
所も。皆庭上に並み居つ。君の宣
旨を待ち居たり君の宣旨を待ち
居たり。「いかに貫之」「御前に

子方「始めよりふ所が相手には黒主を定めたりぷまづまづふ所が歌を讀み上げいへ（貫之閑カニ）「畏つていぬ。水邊の草（気ヲカケ覚タリ）（上ヲ）なくに何を種とて浮草の波のうね（子方詞）うね生ひ茂るらん「面白と詠み たる歌やこの歌に勝るはよもあらじ。皆々詠じいへ（貫之閑カニ）「畏つていぬ（後ヲ半黒主カミツテ）「暫く

ぴ。これは（確カリ）古歌にていぬ（子方）「何と古歌と申すか（ワキウケテ）「さんぴ（子方確カリ）「いかにふ所。何とて古歌をば申すぞ（後ニテ小町上ニ気ヲカケスカリ）（ヨワク）「恥かしの勅諚や。先代の昔はそも知らず。既に（詞）夜通姫（中スカリ）この道のすたらん事を（ナゲ）歎き。和歌の浦わに跡を垂れ給ひ。玉津島の明神（ヨリ）よりこの方皆

この道をたゝなむなり。それに今の歌を古歌と仰せは。古今萬葉の勅撰にていかゞ。又は家の集にてあるやらん。作者は誰にてましますぞ。委しく仰せられへ。「仰せの如くその證歌分明ならではいかでか奏し申すべき。草子は萬葉

題は夏。水邊の章とは見えたれども。讀人知らずと書きたればシテカツテ閑カニ「それ萬葉は奈良の天子の御宇。撰者は橘の諸兄。歌の數は七千首に及んで。皆わらはが知らぬ歌はさもらはず。萬葉といふ草子に數多

の本のいかおぼつかなうこそいへ
「げにげにそれはさる事なれども
さりながら。御身は衣通姫の流
なれば。あはれむ歌にて強からね
ば。古歌を盗むは道理なり「さて
はおことは古の猿丸大夫の流れ。
それは猿猴の名を以て。わが名

を餘所に立てんとや。正〳〵それ
は古歌ならず「花の蔭行く山
賤の「そのさま賤〳〵き身ならね
ば。何とて古歌とは見るべきぞ
「さて言葉をたゞさで誤りしは。富士の
なるその大將や。四病八病三代
八部同じ文字「文字もかほどの

同上

誤りは「昔も今も「ありぬべし、
不思議や上古も末代も。三十一字
のそのうちに。一字も変らで詠み
たる歌。これ萬葉の歌ならば和
歌の不思議と思ひべし。さらば證
歌を出だせとの。宣旨度々下りし
かば。初めは立春の題なれば花も

盡きぬと引き開く。夏は涼しき浮
草のこれこそ今の歌なりとて。既に
讀まんとさしあぐれば。わが身にあ
たらぬ歌人さへ。胸に苦しき手を
置けりとまてやふ町が心のうち
たゞ轟の橋うち渡りて危き心は
隙もなし、「恨めしやこの道の。

大徳柿の本のまうち君も。小町をば捨てはて給へか。恨めしやな。この歌古歌なりとて。左右の大臣その外の。局々の女房達も。小町一人を見給へば。夢に夢見る心地して。定かならざる心かな。この草子を取り上げ見れば。行の次第もしどろにて。文字の墨つき違ひたり。

詞 内へ入る心にて

いかさまふ町がひとり詠ぜを黒主立ち聞きして。帝へ古歌と訴へ申さんためにこの萬葉に入筆したるとおぼえたり。あまりに恥かしうさむらへば。清き流れを掬び上げ。この草子を流はばやと思ひ

貫之詞「小町はさやうに申せども。もし又さなきものならば。青丹衣の風情たるべし」とにかくに思ひまはせども。やる方もなき悲しさに泣く泣く立ちてすごすごと帰る道すがら人目さがなやあかしや。貫之詞「小町暫く御待ちれへ。その由奏聞申さうずるにてい。いかに奏聞申しい。小町申しいは。唯今の萬葉の草子をよく見いへば。行の次第もしどろにて。文字の墨つきも違ひてい程に。草子を洗ひて見たき由申しい

子方「げにげに小町が申す如く。さらば洗ひて見よと申しいへ」貫之「畏つてい。いかに

小町。勅諚にてあるぞ。急いで草子を洗ひひへ。シテ上来リ「論言なれば嬉しくて。落つる涙の玉襷むすんで肩にうちかけて。既に草子を洗はんと

次第同上

和歌の浦わの藻塩草和歌の浦わの藻塩草波よせかけて洗はん

シテ一セイ上ニ「天の川瀬に洗ひしは「秋の七日の夜なり「花色衣の秋には「梅の匂ひや。交るらん。雁がねの。翼は文字の數なれど。跡定めねばあらはれず。潁川に耳を洗ひしは「濁れる世をすまけり「蒼苔の鬚を洗ひしは「川原に解くる薄氷「春の歌を洗ひては霞の袖をとかうよ

○獨吟

シテ上、「冬の歌を洗へば冬の歌を洗へば
地上「袂も寒き水鳥の上毛の霜に洗
はん上毛の霜に洗はん。戀の歌の
文字なれば忍び草の墨消え
シテ「涙は袖に降りくれて。忍び草も乱る
る忘れ草も乱るゝ　地上「釋教の歌の
數々は　シテ「蓮の糸ぞ乱るゝ　地「神祇の歌

は榊葉の　シテ「庭火に袖ぞ乾ける　地「時雨
に濡れて洗ひ　シテは　「紅葉の錦なり
けりや　地「住吉の。住吉の。久しき松を洗
ひては岸に寄する白波をさつとかけ
て洗はん。洗ひ洗ひて取りあげて。
見れば不思議やこはいかに。數々の
その歌の。作者も題も。文字の形も

少しも乱る事もなく。入筆なれば浮草の。文字は一字も。残らで消えにけり。ありがたやありがたや。出雲住吉玉津島。人丸赤人の御恵み。かと伏し拝み。喜びて龍顔にさし上げたりや。「よくよくよく物を案ずるに。かほどの恥辱よりもあらじ。自害を

せんとまかり立つ。「なうなう暫く。カル上この身皆以てその名ひとりに残るならば。何かは和歌の友ならん。道を嗜む志。誰もかうこそあるべけれ。子方詞「いかに黒主。御前には。子方「道を嗜む者は誰もかうこそあるべけれ。苦からぬ事座敷へ直りゐへ。「これ又時の面目

なれば。宣旨をいかで背くべき。黒主
御前に畏る。〔地上〕げにありがたきみぎん
かな。小町黒主遺恨なく。小町に舞
を奏せよと。おのおの立ちより花の
打衣。風折烏帽子をきせ申し。笏拍
子をうち座敷を静め物着〔春来つて〕
は。遍くこれ桃花の水〔地〕石に障りて。

○切迫拍子

春来つては

遅く来れり〔手〕まづさへぎる花の〔枝〕
〔地〕〔も〕色の衣や。重ぬらん〔雪降立つ〕中之舞
〔ワカ上〕〔明カ優美ニ〕〔も〕色の衣や。重ぬらん
○仕舞
○霞立てば。遠山になる。朝ぼらけ〔地上〕
〔地上〕〔日〕影に見ゆる。松は千代まで〔拍子ミダル〕松は千代
まで四海の波も。四方の國々も。民の
戸ごとも。さてぬ所代とそ。堯舜の嘉
例なれ。大和歌の起りは。あらかねの

四海のはら

土にして。素盞嗚尊の。守り給へる
神國なれば。花の都の春ものどかに。
花の都の春ものどかに。和歌の道こそ。めでたけれ。

六浦

佐阿彌安清作

曲柄　三番目　鬘物
季節　九月
稽古順　五級
所　武藏國久良岐郡六浦稱名寺

梗概

都方の僧（ワキ）東國修行の旅に出で立ちて、六浦の稱名寺に立ち寄り、山々の今を盛りと紅葉せる佳景を賞せしが、本堂の庭の楓のみたゞ夏木立の如くにて、一葉も紅葉せざるを見て、怪しみをなししほどに、一人の女性（前シテ）出で來り、僧の不審に答へて曰く、昔鎌倉中納言爲相の卿この所に來り、山々の紅葉未だなりしに、この木一本に限り色深く紅葉せるを見て、「いかにしてこの一本にしぐれけん、山に先だつ庭のもみぢ葉」と詠み給ひしかば、この木悦び、功成り名遂げて身退くは天の道なりと心得、爾來紅葉を停めたるなりと。僧も亦手向の歌を詠じて、御身は如何なる人ぞと問へば、眞はこの木の精なりと答へて、行方知れず消え失せたり。（中入）

僧その夜をこゝに旅居して讀經せしに、夜半かの楓の精（後シテ）美しき女姿となりて現れ出で、四季折々の草木の美景を謠ひて舞を舞ひたる後、明方の月影とともに消え行きたり。

謠ひ方

三番目としては位輕きものなり、優美に長閑かなる處を謠ふべし、餘り花やかなるは宜しからず。

△**シテ**　若き里女なれば、呼掛は品よく奇麗に出で、ワキとの掛合は閑かに、「いかにしてこの一本に」と歌を詠ずるなれば、心持し凡て閑かに謠ふ。

△**後シテ**　朗かに出で、クリは大きく、サシは閑かに、上端は寛たりと、「更け行く月の」と閑かに、ワカは優美に、「八聲の」より乘つて伸んびり謠ふ。

△**ワキ**　下り僧なれば、餘り位を持たずに朗かに謠ひ出し、「千里の行も」より跡、詞長ければだれぬ樣に文句に注意し、シテとの掛合はさらりと、待謠は伸んびりと謠ふ、凡て此ワキも素謠にては一人にて謠ふ。

△**地**　中入前の初同はしつくりと出で、留を閑め、クリは大きく朗かに、サシ、クセも閑に落着いて、「色なき袖をや」と大きく閑かに、「八聲の鳥も」と乘つて、以下朗かに謠ふべし。

語　釋

逢坂の關の杉むら ― 滋賀縣大津市の西にある逢坂山。往昔は關所ありたるといふ。

六浦の里 ― 神奈川縣久良岐郡六浦莊村。

千里の行も一歩より云々 ― 孝子に、「九層之臺起二於累土一、千里之行始二於足下一」とあるを引く。

安房の清澄 ― 千葉縣安房郡天津町淸澄にあり。千光山淸澄寺と號し、眞言宗に屬す。日蓮上人の剃髪せし寺。

稱名寺 ― 神奈川縣久良岐郡金澤は、八景を以て有名なる名勝の地、其處にある寺にて、八景の一たる稱名晩鐘といへるもの。今地域は六浦莊村に屬す。

爲相の卿 ― 藤原爲相は、民部卿爲家の第三子にして冷泉家の祖なり。正二位に叙せられ、權中納言に拜せらる。嘉曆三年薨す。年六十六。爲家所領近江國小野の庄並に播磨國細川の庄を長子爲氏に授く。其寵愛衰ふるに及び、奪つて爲相に與へ文券を作りて證とす。爲家薨する後、爲氏、爲相互に相爭ふ。爲相の母阿佛尼、之を鎌倉幕府に訴ふ。由て爲相の有となる。爲氏の子爲世に至りて再び爭ふ。北條氏聽決して更に爲相の領に歸せしむ。爲相和歌に於て天禀の偉才あり。其詠歌新後撰以下、玉葉、千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新續古今の諸集に六十餘首載錄しあり。

如何にして云々 ― 家集藤谷集に、「如何にしてこの一本にしぐれけん山にさきだつ庭のもみぢ葉」と載せたるを引く。

古りはつる云々 ― 「ふりはつる此一本の跡を見て袖の時雨ぞ山にさきだつ」と詠みし歌をいふ。出所詳かならず。

功成り名遂げて云々 ― 老子に、「富貴而驕、自遺二其咎一、功成名遂、身退天之道」とあるを引用す。

月日經て ― 續拾遺集第二卷、春歌下に載す、前中納言源雅言の歌、「わかざりし外山の櫻日數經てうつればかはる峯の白雲」とあり。

昨日はうすき ― 續後撰集第七卷、秋歌下に載す、藤原定家の歌「小倉山しぐるゝころの朝な〳〵昨日はうすき四方のもみぢば」とあり。

露時雨もる山は云々 ― 古今集第五卷、秋歌下に載す、紀貫之の歌、「白露も時雨もいたく洩る山は下葉殘らず色づきにけり」とあり。歌意は、白露も時雨も甚だしくもる此守山の木立は、外の山とちがつて、梢ばかりか下葉までも、殘らず色が染み出でゝ居るとの意。家集には「竹生島に詣づるときもる山といふ所にて」と詞書してある。もる山は、滋賀縣野洲郡にある今の守山なるべし。

値遇の緣 ― 逢ひたるも不思議の緣ぞといふことなり。

秋の夜の云々 ― 伊勢物語に、「昔、はかなくて絶えにける中、なほや忘れざりけん、女のもとより『うきながら人をばえしも忘れねばかつうらみつゝなほぞこひしき』といへりければ、さればよといひて、男『あひ見ての心ひとつをかはしまの水の流れて絶えじとぞ思ふ』とはいひけれど、その夜ねにけり。いにしへゆくさきの事どもなどいひて、『秋の夜のちよを一夜になぞらへて八千夜しねばや飽く時のあらん』かへし、『秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉のこりてとりやなきなん』とあるをかけていふ。

所は六浦の ― 明方六つの時の意にかけていふ。

間狂言

所の者出でワキと問答し、楓の由來を語る。

是は相摸國六浦の里に住む者にて候。今日は何とやらん徒然なる折からなれば。稱名寺のあたりへ立ち出で。山々の紅葉を見て慰まばやと存ずる。いや是なるお僧はいづくより御參りなされたるぞ（此間せりふ常の通り）先この寺は稱名寺と申して。一遍上人の開山にてある由承る。この上人は俗體の時より正直を第一とし。親に孝あり慈悲心を專らとして道心深き故。浮世を厭はん爲に發心を遊ばし。即ち一遍上人と申して諸國を修行あり。念佛を弘め給ふ事。天下に其隱れなくして。殊勝第一の智者にてありたると申す。然れば一年東へ御修行の刻。則ち當寺を御建立あつて。念佛三昧の道場と定め。暫く是に御逗留のうち。本堂の庭にこの楓の木を植ゑ置かれしが。世間の楓とは拔群に變りて。四方の山々は未だなるに。この木に限つて如何にも色美くしく。每年よく紅葉致すにより。當寺の飾りにてあると申され。いづれも寺僧達は申すに及ばず。近鄕他鄕の老若までも。紅葉見には貴賤群集致したるけに候。然れどもその以後に。鎌倉の爲相の卿と申す御方。是を御見物ありたく思し召し。當寺へ御參詣の時分。この名木の今を盛りなるを御覽じ。さながら錦を漂せると云ふとも。是にはいかで勝るべきと思ひ給ひ。その時爲相の卿の御歌に。いかにしてこの一本に時雨けん。山に先立つ庭のもみぢ葉と。かやうに取り敢へず遊ばし給へば。草木心なしとは申せど。この御詠歌を理とや思ひけん。その次の年より一葉も紅葉致さず。御覽ぜらるゝ如く今に靑葉にて候。先我等の存じたるはかくの如くにて候（ワキ）是は奇特なる事仰せらるゝものかな。さやうにいづくともなく女性の來り。古き事語り申すべきもの。爰許にては覺えず候が。さてはお僧の御心中貴きにより。この名木の精女人と現じ。言葉を交はしたるかと存ずる間。末は急ぎの旅なりとも。今宵は是に御逗留なされ。終夜御法を遊ばし。其後いづくへもお通りあれかしと存ずる。

装束附（六浦）		
ワキ	僧	角帽子　着附無地熨斗目　茶水衣 緞子腰帯　扇　數珠 （又ハ大口僧）
ツレ	従僧二人	角帽子　着附無地熨斗目　水衣 緞子腰帯　扇　數珠 （又ハ大口僧）
前シテ	里女	面、若女　鬘　鬘帯　襟白二 着附摺箔　唐織着流
後シテ	狐ノ精	面、若女　鬘　無紅鬘帯　襟白二 着附摺箔　色大口（緋ハ用ヰズ） 萠黄又ハ白長絹　無紅腰帯　無紅扇

六浦

素謡座席順　ワキテ

ワキ僧　ツレ二人上ル　次ヲ拍子ニ合ヨワク「思ひやるさへ遥かなる。思ひやるさへ遥かなる旅に出でうよ」ワキ詞スラリ「これは洛陽の邊より出でたる僧にてゐ。われ未だ東國を見ずゐ程に。この秋思ひ立ち陸奥の果までも修行せばやと思ひゐ」三人道行上ル「遥坂の。関の

杉むら過ぎがてに。角の杉むら過ぎがてに。行方も遠き湖の。舟路を渡りゆを越え。幾夜な夜なの草枕明け行く空も星月夜鎌倉山を越え過ぎて。六浦の里に着きにけり六浦の里に着きにけり 「千里の行も一歩より起るとかや。遥ゞと思ひゝへども。日を重ねて急ぎゝほどに。これはは早相模の國六浦の里に着きて。この渡りをして安房の清澄へ参らうずるにて。又あれによしあるげなる寺のゝを人に問へば。六浦の稱名寺とかや申しゝ程に。立ち寄り一見せばやと

思ひい。なうなる景覽いへ。山々の紅葉今を盛りと見えて。さながら錦を晒せる如くにていい。都にもかやうの紅葉のいべきか。又これなる本堂の庭に楓のいが。木立餘の木に勝れ。たゞ夏木立の如くにて一葉も紅葉せずいい。いかさまいはれのなき事はいまじ。人来りていはゞ尋ねばやと思ひい。

シテ女呼掛「なうなう御僧は何事を仰せいぞ。

ワキ「さんぶこれは都より始めてこの所一見の者にていが。山々の紅葉今を盛りと見えていに。これなる楓の一葉も紅葉せずい程に不審をなしい。

シテ同「げによく覽じとがめていい。

いにしへ鎌倉の中納言為相の卿と中〜入。紅葉を見んとてこの所に来り給ひ〜時。山々の紅葉いまだなりしにこの木一本に限り紅葉色深くだぐひなかりしかば。為相の卿どあへず。いかにしてこの一本にしぐれけん。山にさきだつ庭のもみぢ葉と詠

ツレ「ワキの問答

じ給ひ〜より。今に紅葉をとゞめて

ワキ「面白の歌詠やな。われ數ならぬ身なれども。手向のためにかくばかり。

中入

古りはつるこの一本の跡を見て。袖のしぐれぞ。山にさきだつ

シテ詞「殊勝にあらありがたの御手向やな。いよいよこの木の面目にてこそ

ワキ「さてさてさきに

為相の卿の歌詠歌より。今に紅葉をとどめたる。謂れはいかなる事やらん「げに不審は御理り。さきの詠歌に預かりし時。この木心に思ひやう。かくるあづまの山里の人も通はぬ古寺の庭に。われさき立ちて紅葉せずは。いかで妙なる詠歌にも預かるべき。功成り名遂げて身退くは。

詞 これ天の道なりといふ古き言葉を深く信じ。今に紅葉をとどめつ。たゞ常磐木の如くなり

ワキカル上来 「これは不思議の御事かな。この木の心をかほどまで。知ろしめしたる御身はさて。如何なる人にてましますぞ

シテ詞「今は何をかつゝむべき。われはこの木の精なるが。お僧たつとくましますゆゑに。唯今現れ来りたり。今宵はこゝに旅居して。夜もすがら。御法を説き給はゞ。重ねて姿を見え申さんと。

中入歌

夕べの空もゆゑ〻

夕べの空も冷しく。この古寺の庭の面。霧の籬の露深き。千種の花をかき分けて行方も知らずなりにけり。中入間

ワキ待謡「所から。心に叶ふ稱名の。心に叶ふ稱名の。御法の聲も松風もはや更け過ぐる秋の夜の。月澄み渡る庭の面。寝られぬものか。面白や寝られぬものか。面白や。

後シテ楓精上ノ一声「あらありがたの御用ひやな。

妙なる値遇の縁に引かれて。二度こゝに来りたり。夢ばゝ覺まし給へ

（ワキカル上）「不思議やな月澄み渡る庭なよ（サシ上）

の面に。あり つる女人とおぼしくて。影の如くに見え給へぞや。草木國土悉皆成佛（含）のこの妙文を疑ひ給はで。なほなほ昔を語り給へ

（シテクリ）「それ

○サシ曲獨吟
○切迄囃子

○仕舞

同

四季をりをりの草木。已々の時をへて

（ケテサラリ）花葉さまざまのその姿を。心なしとは

（サシ上）誰かいふ

○「まづ青陽の春の始め

同

（ウケサラリ）色香妙なる梅が枝の。かつ咲きそめて諸人の心や春になりぬらん

（シテ中）「又は

同

櫻の花盛り。たゞ雲とのみ三吉野の

（中）千本の花に。如くはなし（切）

○月日經て。

移れば変る眺めかな。櫻は散りし庭

の面に。咲きつゞく卯の花の。垣根や

雪にまがふらん。時移り夏暮れ秋

も半ばになりぬれば。空定めなき

村時雨。昨日は薄きもみぢ葉も。露時

雨もる山は。下葉残らぬ色とかや

シテ上「朝ガ

さるにても。東の奥の山里に あか

らさまなる都人の。あはれも深き

言の葉の露の情に引かれつ。姿

をまみえ数々に。言葉をかはす値遇

の縁。深き所法を授けつ。佛果を

得しめ給へや。シテ中「カニスアリ

「更け行く月の。夜遊

シテワカ上「

「秋の夜の。千夜を一夜に。重ねても

をなし 地上「色なき袖をや返さまし 序之舞

○仕舞

地「言葉残りて。鳥や鳴かまし。シテ八聲の鳥も。数々に。八聲の鳥も。数々に。鐘も同ゆる。明方の空の。所は六浦の浦風。吹きしをり吹きしをり散るもみぢ葉の。月に照りそひてからくれなゐの。庭の面。明けなば恥かし。暇申して。帰る山路に行くかと思へば。木の間の月の。行くかと思へば。木の間の月のかげろふ姿。なりにけり。

松山鏡

作者不詳

曲柄　五番目切能
季節　不定
稽古順　三級
所　越後國東頸城郡松之山家中尾村

梗概

越後の國松の山家といふ所に、母を失へる一人の姫（子方）あり。母臨終の時、われに會ひたしと思はばこれを見よとて、鏡を與へしに、姫は人知れずこれを見て、眞の母に會ふ思ひをなしるたり。一日姫の父亡き妻の命日を弔はんとて持佛堂に來りしに、姫急ぎてかの鏡を隱ししかば、さては人のいふが如く、今の繼母を呪詛するものならんと、その不心得を責む。姫亡き母の遺言を語りて父の疑ひを解けば、父、この松の山家は無佛世界の所にて、鏡など知る者もなかりしに、われ一年都にてこれを買ひ取りかの母に與へたるなり。されば姫はなほ鏡の謂れをも知らずして、鏡に映るわが姿を母の影と思へるなりと、鏡の理を教へて、姫の心根をあはれむ。とかくするほどに、母の亡靈（ツレ）うつゝに現れ出づれば、また亡靈を引き連れんとて俱生神（シテ）現れ出でしが、鏡に映る亡靈の姿の菩薩と變れるを見て、孝行の奇特に感じ、われ一人地獄に立ち歸りぬ。

謠ひ方

ワキを主とせるものにて、子方を配し詞の多き曲なれば、文意に注意し、他は概ねさらりと謠ふべし。

△**シテ**　地獄よりの使者なれば、手強く豪壯に謠ひ出し、「こはいかに」と少しゆるめて謠ふ。

△**ツレ**　前シテとも云ふべきものなれば常のツレより位を持ち、淋しく閑かに出で、サシは抑へて、上端も浮かぬ樣に謠ふ。

△**子方**　子方としては重きものなれど、心持を付けぬが宜し凡てさらりと、「怨めしやあれ程」とクリの心にて、クドキはさらりの心にて謠ふべし。

△**ワキ**　ワキ方にては習ひなり、位を保ち確かりと大きく名乘り出し、語りの所二ケ所あり、文句に心付け緩急あり、子方との掛合も閑かに確かりと謠ふ。

△**地**　初同はさらりと出で、「我には見せよ」としつとりと「子ながらも」とさらりと、クリはしつとりと浮かぬ樣に、サシは閑かに、クセも閑かに運びを付け、上端より稍さらりと浮か

ぬ樣に、「空蟬の」と乘つて以下手强く力を込めて謠ふべし。

語　釋

松山鏡 ― 松の山家の女が未だ見たることなき鏡を、母の形見とてもらひ、影のうつるを母かと思ひ悲しむによる。

對の屋 ― 中古時代の家の建築方は、中央に寢殿ありて、主人の住む處とし、其東西に相對せる家ありて、妻妾娘などの住む處とす。これを對の屋又は東の對、西の對と呼稱す。

かれが母 ― 繼母に對していふ。

雲となり雨となり ― 昔、楚の襄王陽臺に行幸ありし時、夢に神女來つて會合したるが、別れに臨み、我は巫山の南にあり。朝には雲となり、暮には雨とならんと、誓ひたりと見て夢さめぬ。よりて神女の廟を立てゝ巫女廟と名づくとあるによる。

花と散り雪と消え ― 昔、晉の石崇、金谷の別館にありて、綠珠といふ美人を寵しつゝ遊び居たるが、趙王倫に襲はれて、綠珠は樓下に投死し、崇は東市に斬られしをいふ。

咀呪 ― 神佛に祈願して、その怨敵をのろふことなり。大灌頂神呪經に、「呪二詛汝兒子一稠熾如二火盛一」といひ、東鑑に、「奉レ崇二妙見大菩薩一奉レ呪二詛源家一由有二其聞一」とある類をいふ。

おことも同じ蓮の緣と ― 一蓮托生の意。

鏡山立ちより給へ云々 ― 古今集第十七卷、雜歌上に載す、讀人知らずの歌、「鏡山いざ立ち寄りて見てゆかん年經ぬる身は老いやしぬると」とあり。歌意は、鏡山といふ山なら人の影がよく映るべし、年久しく經て來たこの身は、老い朽ちたか如何か立ち寄つて見てゆかうとの意。鏡山は、滋賀縣蒲生郡にある名所。

漢の武帝の后 ― 白氏文集、漢武帝、初喪二李夫人一の句に、「夫人病時不レ肯レ別、死後留得生前恩、君恩不レ盡念未レ已、甘泉殿裏令レ寫レ眞、丹青寫出意何益、不レ言不レ笑恁二殺人一」とあるを引く。

反魂香 ― 白氏文集に、「又令二方士一合二靈藥一、玉釜煎鍊金爐焚、九華帳深夜悄々、反魂香降二夫人魂一、夫人之魂在二何許一、香烟引到二焚レ香處一」とあり。

おろかに ― 山鳥のをろを云ひかく。萬葉集第十四卷、東歌、相聞、「山鳥のをろの初尾に鏡かけとなふべみこそなによそりけめ」とあるを引く。

思ひ隔てゝ山鳥の云々 ― 山鳥は、雌雄互に谷を隔てゝ住む故に云ふ。萬葉集第八卷、大伴宿禰家持、贈二坂上大嬢一歌、「足引の山鳥こそは尾むかひに妻問ひすと云へ空蟬の人なる我や何すとか一日一夜もさかり居て嘆き戀ふらん」云々とあるを引く。

たらちねの親の飼ふ蠶の云々 ― 拾遺集第十四卷、戀歌四に載す、柿本人麿の歌、「たらちねの親の飼ふ蠶の繭ごもりいぶせくもあるか妹に逢はずて」とあり。萬葉集第十一卷、寄レ物陳レ思には二の句、「母が飼ふこの」とあり。

無佛世界 ― 佛敎の行はれぬ至極の田舍。

はごねをつけず ― 齒を染めざること。

色を飾る事 ― 白粉をつけ粧ふ事をいふ。

三吉野の岸の山吹云々 ― 古今和歌六帖の歌、「吉野川岸の山吹ふく風に底の影さへうつろひにけり」とあるを引く。

歌冬 ― 山吹のこと。

往事渺茫云々 ― 朗詠集、懷舊に載す、贈二微之十七韻一、白居易の詩句中に、「往事渺茫都似レ夢、舊友零落半歸レ泉」とあり。詩意は、壯年の盛なりしことは夢のやうに覺ゆ、舊友は四方に散りて、今は黃泉の客となりしとの意。この詩は、白氏文集十七にあり。樂天舊友元稹に澧水の邊にて別れし後、五年して夷陵といふ所にて遇ひて、三夜語り明して別れに送りしものなり。

是を水といはんとすれば云々 ― 源順の賦二花光浮一水上一序に、「至二彼和風扇分粧彌亂、迅瀨咽分影不レ閑、花非レ花、水非レ水、欲レ謂二之水一則漢女施レ粉之鏡淸瑩、欲レ謂二之花一蜀人濯レ文之錦燦爛」とあるを引用す。

形見の鏡破りてなほ云々 ― 昔、陳亡びし時、德言は妻と別るゝとて鏡を二分して、互の形見とせし事あるをいふ。

三日月の ― 二分せし鏡の半面は、恰も滿月を二分せる如くなるゆゑ、かくいふ。

あらぬ妹背の云々 ― 新夫婦。妹背の川とつゞけ云へるは、古今集第十五卷、戀歌五に載す、讀人知らずの歌、「流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中」とあるを引く。歌意は、川も流れては妹山背山の中に落つる吉野川を隔てるやうに、總て男女の中も長らく遇はずに年久しくなれば、何時までも元のやうに睦まじくは無くて、自然隔てが出來るとの意。

半月の山の端に ― 破鏡の譬。

いかに罪人 ― 母の幽靈、此世にあまり長居をするを、呼びに來りたるをいふ。罪人は、佛法上の罪人をいふ。

倶生神 ― 罪人を責め苦しむる神をいふ。

笞（しもと） ― 罪人を打つ杖をいふ。

玻璃の鏡 ― 閻魔の廳に据ゑ置きて、娑婆にありし時の罪科を寫し見る鏡をさす。

膚は金色 ― 佛の身體は金色なればいふ。

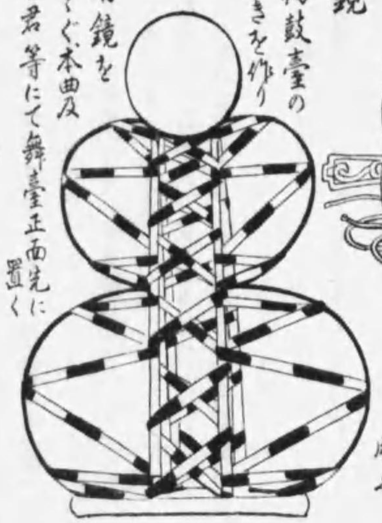
兩臂をかゞみて ― 合掌の狀をいふ。

御空に花降り虛空に音樂云々 ― 佛來迎の狀をさす。

大輪冠

本曲後シテ頂くことあり、金屬にて作りすべて頭著たる上に冠る、嵐山、國栖等に用ひ、また玉井等に大龍戴として用ふ、

鏡



羯鼓臺の如きを作り用鏡をかくぐ、本曲及昭君等にて舞臺正面先に置く

作物	シテ	ツレ	ワキ	子方	裝束附（松山鏡）
	俱生神	母ノ靈	父	姫	
鏡臺 杖	面、小癋見 輪冠又ハ唐冠 赤頭 金地鉢卷 襟紺 着附厚板 半切 法被 鋪紋腰帶 修羅扇	面、痩女 癋 無紅癋帶 襟淺黄 無紅縫箔腰卷 無紅縫腰帶 白水衣又ハ白練坪折	着附段熨斗目 素袍上下 小刀 扇 掛絡 數珠	癋 癋帶 襟赤 着附摺箔 唐織着流	

松山鏡

素謠座席順
子方 ツレ 女 シテ ワキ

ワキ 父詞シトヤカニ寛タリ

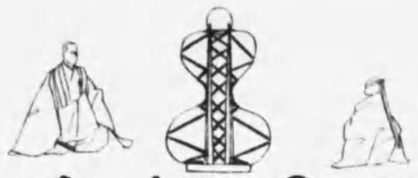
「これは越後の國松の山家に住居する者にて候。さても某久しく添ひ馴れし妻におくれ、昨日今日とは存じ候へども、はや三年になりて候。又忘れ形見に姫を一人持ちて候が、あまりに母が事を歎き候ほどに。

對の屋を造り傍に置きてけり。又今日はかれが母の命日にて、程に持佛堂に立ち出で、燒香せばやと思ひけ

子方姫サシ上ヨワク

雲となり雨となり。陽臺の時留め難く。花と散り雪と消え。金谷の春行方もなし。月日の道に閑守なければ。母御に離れて今年はは。既

に三年のその日なり。「あら無慙や。何事やらん姫が獨言を申しけいかに姫があるか。父が來りたるぞ。持佛堂をあけけへ。あら不思議や。何やらん物を立ち隱すやうにけいかに姫。さても汝が母におくれし時。元結切り遁世せばやと存じけひつれども。



一族どもの諫めにより。今まで浮世の住ひたり。汝男子ならば。父と一所にあるべけれども。女子なれば對の屋を造り置くなり。それに父が來りて姫よと呼ばゞ。さも嬉しげに立ち迎へべきにさはなくして。何やらん物を立ち隱すけしきの見えて。

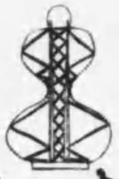
さては人の申すも眞にてゐひけるぞや。げに汝は今の母を木像に作り。明暮呪詛するといふは眞か。何とてさやうにあさましき心をば持ちてあるぞ。母を怨しく思はゞ。怪念佛しし。佛に吊ひてこそ。死したる母も成佛しし。おこともも同じ蓮の縁となる

べきにさはなくしてさやうに恐ろ
しき事をたくまば。正く落かむ
べき母も奈落に落に沈み。おことも同
じ罪に沈むべき事の浅ましさよ。
抑テ確カリ何とて物をば申さぬぞ 「子方カル上ル」サラリ「さやうに
御叱りはぐ。隠さず申しゆべし。
痛はしや母ぢ前。今を限りの御

時この鏡をわざぜにとらするなり。
母が姿を残す形見なり。慈しき
時は見るべしと。仰せひし程に。
或時この鏡を見れば。母の面だて
映りしよりなほ若やぎて見え給
へば 上歌同 ○さては亡からん跡までも。
さてはこからん跡までも。添ひ添は

れんと面影を。残させ給ひける。母御の慈悲ぞありがたき。不審に思しめされば。見せ奉らせん鏡山立ちより給へ父君前。

ワキ詞「これは不思議なる事を申すものかな。空くなりし母の御に鏡に映りて見えんべき。但しきつと思ひ出だたる事のゐ。漢の武帝の后李夫人なくならせ給ひて後帝后の御別れを悲しみ給ひ。御姿を甘泉殿の壁にうつし。明暮叡覧ありしかどももとより繪にかける形なれば。物いはず笑はず。なかなか憂ひぞ増ると悲しみ給ふ。ある時仙人の告げて



曰くまことに后の御姿を叡覧ありたく思召めさば。月の夜の隈なからんに。及魂香を焚き給へとありしかば。教へに任せて月の夜の隈なきに及魂香を焚き給へば。煙のうちに后の御姿まみえ給ひしなつかしもあり。

（元ヲカ別ニ出シ）又わが朝の聖武皇帝の后。光明皇后なくならせ給ひて後。これも后の御別れを悲しみ給ひ。梵天に祈誓し給へば。閻王憐み給ひ。玉の輿に乗せ奉り。二度娑婆に送り給ひしなつかしもあり。（確カリノニ）さりながらそれは上代の事。これは末世の今の世にさやうの事のあるべきとは

なじはねどもかれが母も姫に
名残を深く惜しみひしほどに。若
しよさやうの事もやらん。立ち
寄りて鏡を見ばやと存じいや。
さればこそ筋なき事を申しいや
あいかに姫。その鏡に母が影の映る
事はなきぞとよ。確かりて筋なき

事をば申すぞ。子方上未「恨めしやあれ程
母のまゝますを。思ひ隔てゝ山鳥
のおろかに見させ給へかと。鏡の前に
泣き居たり。げにや別れての涙
も未だ干ぬ袖に。異妻を重ね給ひ
ぬれば。その恨みにや恋衣の見えじ
と思へめさるらめよし父にこそ

○小謡

疎くとも（下歌同中間カヘテ拍子合）われには見えよたらちねの。親の飼ふ蠶の繭のいと細し誰をかも。恋ひ痩せ顔ぞ見てもなく。涙がすみの悲しやな。底よりも曇り眞澄鏡。あれこそ母よ恨覽せよとわが影に指をさすげにあはれなりさればこそ幼き身の心なれ幼き身の心なれ。（早詞心持シテ雄カリ）言語道斷の事。わが影の鏡に映るを見て。母が影にてある由申しはいかに。總じてこの松の山家と申すは。無佛世界の所にて。女なれども齒鐵漿をつけず。色を飾る事もなければ。まして鏡などと申すものをも

知らずいひ〳〵を。某一年都へ上りし時。鏡を一面買ひ取りてかれが母に取らせてゝへば。世になき事に悦びいひ〳〵が。今はの時姫を近づけわれを愛〳〵く思はん時は。この鏡を見よと申〳〵ほどに。わが影の映るを見て母と思ひ歎く事の不便さは

いと。いやいや所詮鏡の謂れを語つて。歎きを停めばやと思ひいやあいかに姫。總じて鏡といふ物には。何にてもあれ向ふ物の影の映るぞとよ。これ見へ。父が立ち寄れば父が影。扇を映せば扇の影。こを見て思ひ知れ

子方カル上ヘ

「げにげに父の仰せの如く。

今こそかくともみ三吉野の　ワキ「岸の
山吹風吹けば　子方「底なる影も散れ
ば散り　ワキ「靡けば靡く欲多の
子方「影をあやまつ　ワキ「はかなさよ　同上　子なが
らもこれ程母に似けるよとわが影
ながらなつかしや　ワキ中「父は涙にかき
くれてや　同中　われこそは曇らすれ。

面目なの鏡や　ワキ入　會釋「子は親に似る
なるものと思はれて。恋き時は。鏡
をぞ見る　往事渺茫として。すべて
夢に似たり。舊遊零落して半ば。泉
に帰す　○これを水といはんとすれば
即ち漢女が粉を添ふる鏡清瑩たり
ツレ上「花といはんとすれば。蜀人文を洗ふ

○サシ曲獨吟

ツレ毋中

錦　同　われとても波安の故郷に立ち
帰らば。錦の袴君がため　「昔を語
り。中すべし　同　夢驚かし。給へなよ

名　唐土に陳氏とて。賢女の聞えありけ
るが。世の習ひ思はずも夫遠行の子
細ありどれや限りと思ひけん。形見の
鏡破りてなほ光ぞ残る三日月の。宵

に待ち明けて恨み。文も絶え主も来
ず。憂き年月を古里の。軒端の萩の
秋更けて。風のたよりのつて聞けば。
夫はその國の主となりあらぬ妹背
の川波の。立ち帰るべきやうもなし。
さては逢て事も。形見の鏡われ獨り。
涙ながらに影見れば。半月の山の端に

中　うち傾いて泣くならでぜん方もなきをりふしに「いづくよりとも知らざりし」同　鵲一つ飛び来り陳氏が肩に羽を休め。飛びめぐり飛びさがり舞ふと見るが不思議やな。ありし鏡のわれとなり。もとの如くになりにけり。満月の山を出で碧天を照らす如くなり。

シテ俱生神上　早苗寸上　抽手合ハス

中　これや賢女の名を磨く鏡なるべし。いかに罪人何とて遅きぞ。序時の暇といひつるに。冥官怒りをなし給へば。俱生神急ぎ苦患を見せよとの仰せを蒙り。瞋恚の燃え立つ熱鐵の笞を振り上げて、太鼓頭抽手合ヤ　空蟬の。空蟬の。骸は娑婆にやとまるらん。魂は

冥途にもぬけの衣の。玻璃の鏡の。
いさぎよき面前に。引つさげ引き向
けあれ見よ婆にての。罪科よ

働 寺上寺返

シテ中 ヒカリ

同 道ヒカリ

○仕舞 ○こはいかに不思議やなこはいかに
不思議やな孝子の吊ふ功力によつて。
鏡の影をよくよく見れば。頭に玉釵。
膚は金色兩臂をかゝみて手を合

鏡にも似

浄土に花降り
虚空に香薫

すはや地獄に
帰るぞとて

はすれば。さながら菩薩の。坐像か
と。浄空に花降り虚空に音樂。聞
かず見もせぬ冥途の奇特。すはや
地獄に帰るぞとて。大地をかつぱと。
踏みならし。大地をかつぱと。踏み破
つて。奈落の底にぞ。入りにける。

昭和七年五月十日納本
昭和七年五月十五日發行

福本與吉

訂正著作者　廿四世　觀世左近

東京市神田區錦町一丁目十番地

發行兼印刷者　檜常之助

東京市神田區錦町三丁目十番地
振替東京三五五二番、電話神田二五二六番

發行所　檜書店

京都市二條通麩屋町東北角
振替大阪三六一八番、電話上二一九〇番

著作權所有
觀世流
昭和七年

終